悪魔の力を持ちし魔法使い

超魔導士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
悪魔の力を持ちし魔法使い

【Ｎコード】
Ｎ１８３６Ｓ

【作者名】
超魔導士

【あらすじ】
一人の青年は弟を守るため右腕を犠牲にした。
そして、青年は願った“弟を守る力が欲しい”と“悪魔に魂を売ってでもいいから弟を守れる力が欲しい”とその日から青年の右腕は異形の姿へと変わった。

始まりの日

業火焼かれていく村の中に小さな子供の姿があった。

「兄さん！！」

「ネギ！！」

ネギと呼ばれた小さな子供が自分の兄を呼んだ。

「！？…危ねぇネギ！！後ろだ！！」

「えっ！？」

兄に言われ後ろを見ると、３ｍはあろうかという悪魔が大剣を振りかぶっていた。

「うわぁ！？兄さん！！」

「くっ！？」

兄は自分の出せる限りのスピードでネギの元へ走り

「オラァッ！！！！」

思いきり地面を蹴り、大剣を振りかぶっていた悪魔の顔面に渾身のドロップキックを放ち怯ませた。

「大丈夫か！？ネギ！！」

「う、うん！！…兄さん危ない！？」

「っ！？」

ネギの言葉に反応し前を見ると、先程怯ませた悪魔が大剣の剣先を突き出してきた。

兄はネギだけでもと思い右腕を前に出し

ザシュゥッ

「がぁぁぁっ！？」

「兄さん！？」

悪魔の剣先を突き刺さした。

「ネギ……お前だけでも逃げろ……。」

「そんなのイヤだ！！兄さんを置いてくなんて……そんなのできないよ！！！！」

「いいから行け……。」

「でも…。」

「行けえぇぇぇ！！！！」
兄は声を張り上げ叫んだ。
ネギは、一瞬ビクッと身体を震わせ走り出した。

そんな弟の後ろ姿を見て兄は“ネカネと一緒に楽しく暮らせよ”とそう願った。
そして、自分の死を覚悟した。

「ヨクモニガシテクレタナ、ニンゲンフゼイガ！！」
そう言って、悪魔は右腕に刺さった大剣を引き抜き再び振りかぶった。

「さよならだ……ネギ。」
兄はそう呟き、目を瞑った。

その時

ドガァンッと大きな音が聞こえ、目を開けると悪魔の姿どこにもなく代わって一人の赤毛の髪をした男性が目に入った。

「と……父…さん……。」
そう呟くと、声が聞こえてきた。

『……ロ…ネ……ネロ…』

「…はっ！！」

そして、一人の青年が目を覚ましベッドから起きあがった。

「ネロ、大丈夫？ずいぶんうなされてたわよ。」

「あぁ、ネカネか。大丈夫だ……ちょっと懐かしい夢…見ちまっただけだ。」

「そう？じゃあ、朝食出来てるから早く降りてきてね。」

「わかったよ。」

そう言って、ネカネと呼ばれた女性は部屋から出ていった。

「そういや、あの日からだったな俺が力を求めたのは……。」

青年は包帯でぐるぐる巻きにされた右腕から包帯を取りながらながら呟いた。

「そして、悪魔に魂を売ってでもいいからネギを守れる力が欲しいって願って……」

それと同時に右腕から包帯がすべて取られた。

「…それで……こうなっちまったんだよな……俺の右腕…。」

そう呟いた、青年の目線の先には青白い光を放つ異形の右腕があった。

それは例えるならばまさに

『悪魔の右腕』

キャラ紹介

名前：ネロ・スプリングフィールド

年齢：１７

身長：１８２？

体重：７８？

性別：男

髪型：ネギと瓜二つ（しかしアンテナはない）

髪の色：銀色（元々はネギと同じ色合いだったが悪魔襲撃以来何故か銀髪になった）

家族構成
長女：ネカネ・スプリングフィールド
長男：ネロ・スプリングフィールド
次男：ネギスプリングフィールド
の三人家族

性格：誰であろうとタメ口で話し、叱る時は叱り、褒める時は褒めるといった感じ
また、弟のネギがピンチになると限界を越えた力を出す

使用武器
ブルーローズ：ネロが自作した大型リボルバー。一度に二発の弾が撃てるようになっている。製作期間は約1年
レッドクイーン：ネロが自作した身の丈程の大剣。持っている部分を捻る事で推進剤が噴出され切れ味・破壊力を高める事ができる。製作期間約3年
悪魔の右腕［デビルブリンガー］：悪魔襲撃事件以来変化してしまった異形の右腕。普段は包帯でぐるぐる巻きにして人目につかないようにしている。幻影のような腕が現れ重たい物（約5t近い物）を持ち上げたり腕を伸ばしたりできる。

ネギ卒業、そして麻帆良学園へ

魔法学校

「卒業証書授与……この七年間よくがんばってきた。だが、これからの修行が本番だ、気を抜くでないぞ。」
現在、魔法学校では卒業式が行われていた。

「ネギ・スプリングフィールド君！！」

「はい！！」
そこにはネロの弟ネギの姿もあった。

卒業式後

魔法学校・広場

「あっ！！兄さん！！」
そこでネギは、広場のベンチに足を組んで座り、ヘッドフォンで音楽を聴いていた兄ネロを見つけて駆け寄った。

「よぉネギ、卒業おめでとう。」

「うん！！ありがとう！！」
ネロから祝福の言葉をもらいネギは嬉しそうに笑った。
するとそこへ
「ネギ～！！」
「ネカネお姉ちゃん、それにアーニャ！！」
ネギの姉ネカネと幼馴染みのアーニャが歩いてきた。
「卒業おめでとう、ネギ！！」
「ありがとう、ネカネお姉ちゃん！！」
「ねぇ、ネギは何て書いてあった？私はロンドンで占い師よ。」
「へぇ、アーニャは占い師か……がんばれよ。」
「はい！！ありがとうございます、ネロさん！！」
ネロはアーニャにも祝福の言葉を贈り、アーニャは笑いながら礼を言った。
ちなみに、アーニャはネロに対しては何故か敬語で話してしまう。

「で、ネギ。修行の地はどこだったんだ？」

「ちょっと待って、今浮かびあがるとこだから。」
するとその時

ポゥッ

「…あ……。」

「どうだ？」

「え～～と…日本で……先生をやること……。」
その瞬間、一瞬沈黙が訪れ

「「「「ええーー！？（なにーー！？）」」」」
ネギ達は声を張り上げ驚きの声をあげた。

「おい、ジジィ！！ネギが先生ってどういうことだ！？」

「ほぅ…先生か…。」
ネロ達は学園長の元へ行き確認をしに来ていた。

「何かの間違いではないのですか？１０歳で先生など無理です。」

「そうよ！！ネギったらただでさえチビでボケで……。」

「あぅ～。」

「まぁ、アーニャの言う事は気にすんな。元気出せってネギ。」
アーニャに散々な事を言われ落ち込んだネギの頭を撫でながらネロはネギを励ましていた。

「しかし、卒業証書にそう書いてあるのなら決まったことじゃ。立派な魔法使いになるためにはがんばって修行してくるしかないのう。」

「あぁっ…。」

「わぁ！？お姉ちゃん！！」

「よっと！！」
学園長から現実を突きつけられたためかネカネが頭に手を当てながら倒れがネロがしっかりと抱き止めた。

「ふむ…安心せい。修行先の学園長はワシの友人じゃからの。まぁ、がんばりなさい。」
学園長のその言葉で覚悟を決めたのか

「はい！！わかりました！！」
ネギは大きな声で答えた。
その後、ネカネも目を覚ましネギ達は帰っていったが

「で、おぬしはまだワシに用があるのかの？」

「あぁ。」
ネロだけがその場に残っていた。

「ジィさんに少し頼みがあるんだよ。」

「ほぅ…なんじゃ？」

「俺も…ネギと一緒に日本で先生をやらさして欲しい。」

「ほぅ…。」

「あいつは俺のたった一人の弟なんだ……だから頼む！！」
そう言って、ネロは頭を下げた。

「…ダメじゃ……。」

「……。」

「……と言いたい所じゃが、ワシが出す試験を合格できたら構わんぞ。」

「サンキュー、ジィさん!!で、試験ってなんだ?」

「それはじゃの……。」

空港

「わぁ〜、すごいや!!」
ネギはすでにイギリスの空港に来ており初めて見る都会の風景に驚きの声をあげていた。

「…でも、修行の間兄さんと離ればなれか……寂しいな…。」

「何が寂しいんだ?ネギ。」

「へっ!?」
後ろから声が聞こえネギは振り向き驚いた。

なぜなら

「に、兄さん！！どうしているの！？」

先程、離ればなれになるのがイヤだと話題にしていたネロがいたからである。

「なんだよ俺がここにいちゃいけないのかよ。」

「えっ！？ううん！！そんなことないよ！！むしろ嬉しいよ！！でもなんで？」

「あぁ、俺もネギと一緒日本で先生する事になったんだよ。」

「ほ、本当に！？本当に兄さんと一緒に先生になれるの！？」

「あぁ！！ほら行こうぜ！！」

「うん！！」

そう言って、ネロとネギは肩を並べ歩きだした。

「う～む。」
場所は戻ってウェールズの森の中、そこにはネロに試験を与えた学園長が自分の髭を撫でながら目の前の光景に驚いていた。
その光景とは

「ギュルルゥ……。」
ドラゴンが地面に頭をめり込ませ目を回して気を失っていたのだ。

「確かにワシはドラゴンを倒せと言ったが、たった１０分で倒すとはの～。さすがサウザンドマスターの息子じゃな。しかし……一体どうやったんじゃ？」

麻帆良学園到着と、2年A組とのご対面

プァァンッ

只今、ネロとネギは電車の中にいた。

「うわ～、ニッポンは本当に人が多いな～。」

「あぁ。…でもよ、なんか女ばっかじゃねぇか？」

「そうだね。」

「まぁ、女にはやさしくしろよ。」

「うん！！」

ネロとネギが他愛ない会話をしていると、急に電車が揺れ二人共バランスを崩した。

「うぉっと！！」

ネロは一瞬バランスを崩したがしっかりと物を掴みなんとか耐えた。

一方、ネギは

「あうぅ～。」

身長が低いせいか必然的に女性達の胸に顔が当たってしまい顔を赤

くしていた。
しばらくして、揺れが収まりネロはネギの元に駆け寄った。
「おい、ネギ大丈夫か？」
「う、うん。なんとか……。」
「立てるか？」
「うん。」
すると
『次は～、麻帆良学園中央駅～。』
タイミングを見計らったようにアナウンスが聞こえ
プシューー
電車のドアが開いた。
「おっ！！着いたみてぇだな。ほら、ネギ行くぞ！！」
「あっ！！待ってよ兄さん！！」
ネギは急いで先に行ってしまった兄の後についていった。

『学園生徒のみなさん、こちらは生活指導委員会です。今週は遅刻者ゼロ週間。始業ベルまで１０分を切りました急ぎましょう。なお、今週遅刻した人には当委員会よりイエローカードが進呈されます。くれぐれも余裕を持った登校を……。』

「わわわ、何コレ！？すごい人！！これが日本の学校か～！！」
人がなだれのように走っていく光景を目の当たりにしたネギは驚いていた。

「……というかネギ、お前時間大丈夫なのか？」

「えっ！？」
ネロにそう言われ、ネギは懐中時計を開いて時間を見た。

「わぁっ、ホントだ！？僕も遅刻する時間だ！！初日から遅れたらまずいよ！！」

「よしっ！！なら、走るぞネギ！！」

「うんっ！！」
そして、二人は共に地面を蹴り走り出した。

「んっ？」

「…どうした？」

「あの前を走ってる人達……。」
そう言って、ネギは前を指差した。
その先を見ると、オレンジのツインテールと黒のロングヘアーの女生徒が走っていた。

「あの二人がどうかしたのか？」

「えっと、占いの話をしてたみたいだから占ってあげようかなって……。」

「…まぁ、お前がやってやりたいなら構わねぇぞ。」

「うん！！」
そして、ネギは小声で呪文を唱えると例の女生徒の隣まで行き

「あの～あなた失恋の相が出てますよ。」
と言った。

「はぁ～、あのバカ！！」

それを聞いたネロは頭を押さえ、成り行きを見ていた。
すると、案の定女生徒は怒りネギの頭を鷲掴みして持ち上げた。
「あっ、やべぇ！！」
その様子を見てネロは飛び出した。

「取・り・消・しなさいよ〜〜！！」

「あ…いや、あわわ。」

ガシッ

「なぁ、許してやってくれねぇか？」
ネロはツインテールの女生徒の腕を掴み許してくれるよう頼んだ。

「んっ？誰よアンタ……。」

「そいつの兄貴だ。……弟に非があるのは分かるんだけどよ……頼む！！」

「分かったわよ。」
そう言うと、ツインテールの女生徒はネギの頭から手を離した。
開放されたネギはすぐにネロの元に駆け寄った。

「に、兄さ～ん！！」

「はぁ～、泣くな泣くな。…悪かったな、俺の弟が……。」

「もういいわよ！！」
ツインテールの女生徒はそっぽを向きながら言った。

「でも、坊やとお兄さんこんな所に何しに来たん？ここは麻帆良学園都市の中でも一番奥の方の女子高エリアやで。」

「あぁ、実はな「お～いネギ君！！ネロ君！！」…この声は？」

「あっ……。」
ネギも聞こえたのか上の方を見た。
その先には眼鏡をかけ無精髭を生やした男性が窓から見下ろしていた。
すると、ツインテールの女生徒は顔を赤くさせ急に礼儀正しくなった。

「た、高畑先生！？お、おはよーございま「久しぶりタカミチーッ！！」「よぉっ！！タカミチ。」…！？……っ…し、知り合い…！？」
ネギとネロの言動に度肝を抜かれたのかズザザッと後退りしながら驚いた。

「麻帆良学園へようこそ。いい所でしょう？ネギ先生にネロ先生。」

「え……せ、先生？」

「あ、はい！！そうです！！…コホン……この度、この学校で英語の教師をやることになりました…ネギ・スプリングフィールドです……。」

「同じく、この学校で英語の教師をやる…ネロ・スプリングフィールドだ。」

「え…ええーーっ！？」

「ちょ、ちょっと待ってよ先生ってどーいうこと！？」
驚きの声をあげた後、ツインテールの女生徒が詰め寄ってきたがロングヘアーの女生徒に宥められていた。

「いや、彼は頭がいいんだ安心したまえ。…あっ、あと今日から僕に代わって君達A組の担任になってくれるそうだよ。ちなみに、ネロ君が副担任だ。」
タカミチがそう言うと、ツインテールの女生徒はガーーンッという音が聞こえそうなくらいショックを受けていた。
その後すぐに何か喚いていたが、ネロはタカミチの隣に歩いていった。

「そういやタカミチ、最後にあったのっていつか覚えてるか？」

「そうだね……4年ぐらい前だったかな。最後にあったのは……。」

「そっか！！……あ、やべっ！？」
ちょうどその時、ネギがくしゃみをしようとしているのが目に入り
ネロは駆け出し

「ハ……ハ……ハクシ「ストップ！！」ブッ！？」
左手をネギの顔に押しつけ無理矢理止めた。

「ふぅ、危なかった。」

「ハハハッ、それじゃ学園長室に案内するよ。」

麻帆良学園・学園長室

現在、ネロとネギは学園長室にいたが何故かツインテールとロング
ヘアーの女生徒もいた。
そして、ネロとネギの前には頭の長い老人がおり、どうやらこの老
人が学園長のようだ。

「なるほど、修行のために日本で学校の先生を……そりゃまた大変

な課題をもろうたの～。」

「は、はい。よろしくお願いします。」

「よろしくな、ジィさん。」

「ちょ、ちょっと兄さん！！学園長先生に失礼だよ！？」

「フォッフォッ！！構わんぞい！！……しかし、まずは教育実習とゆーことになるかのう。」

「はぁ。」

「今日から3月までじゃ……。ところで、ネギ君もしくはネロ君には彼女はおるのか？どーじゃな？うちの孫娘なぞ。」

「ややわ、じいちゃん。」
先程まで真面目な話から一変し、急にお見合いの話になり学園長はロングヘアーの女生徒にハンマーで殴られた。
どうやらロングヘアーの女生徒は学園長の孫娘のようだ。

「ネギ君、この修行はおそらく大変じゃぞ。ダメだったら故郷に帰らねばならん、二度とチャンスはないがその覚悟はあるのじゃな？」

「は、はいっ！！やりますやらせてくださいっ！！」

「ふむ、ネロ君はどうじゃ？」

「あぁ、やってやるよ。」
ネロは包帯でぐるぐる巻きの右の掌に左拳を打ち付けながら答えた。
「……うむ、わかった！！では今日から早速やってもらおうかの、
それと指導教員のしずな先生を紹介しよう。…しずな君。」

「はい。」
学園長がそう言うと返事が聞こえ、学園長室のドアが開き誰かが入ってきた。

ボフッ

「む〝。」
そして、その入ってきた人影の大きな胸にネギの顔が埋まった。

「あら、ごめんなさい。」

「…わからないことがあったら彼女に聞くといい。」

「よろしくね。」

「あ…ハイ……。」

「そうそうもう一つ。」
ある程度のことを話し終えた後に、学園長が人差し指を立てながら付け加えた。

「このか、アスナちゃんしばらくはネギ君とネロ君をお前達の部屋に泊めてもらえんかの？まだ住むとこ決まっとらんのじゃよ。」

「もうっ！！そんな何から何まで学園長ーっ！？」
それを聞いたアスナは驚いた。

「かわえーよこの子。それにこっちはイケメンやし。」

「ガキはキライなんだってば！！それに、あんたも何か言いなさいよ！！」

「俺はネギと一緒にいれるならどこでも構わねぇよ。」

「……。」
ネロの一言にさすがのアスナもうなだれた。

廊下

学園長室を後にしたネロ達はネギとネロの二人が受け持つクラスの教室へ向かっていた。

「む〜〜っ。」

「ふんっ。」

アスナとネギは顔を合わせないように互いに反対の方に顔を向けていた。

そして、その後ろをこのか、ネロ、しずなの三人が歩いていた。

「なぁなぁネロ君。」

「んっ、なんだよ？」

その道中、このかがネロに話しかけていた。

「ネロ君とネギ君って兄弟なんか？」

「あぁ、そうだが？」

「あんま似とらへんな。髪の色とか目付きとか……。」

「まぁな。」
このような会話をしていたが、このかがあることに気がついた。
「なぁネロ君。その腕どうしたんや？怪我でもしとるんか？」
それは、右腕の包帯であった。
「えっ？あぁ、ちょっと昔にな。」

「いたないんか？」

「あぁ平気だ。」
すると、ちょうどその時アスナが速足で歩いていった。

「あっ！！待ってぇなアスナ！！じゃあネロ君教室で待っとるえ。」
そう言って、このかも走ってアスナを追いかけていった。
ネロも軽く手を上げて見送り、ネギの元へ向かうとしずな先生から
クラス名簿を貰っていた。

そして

「ほら、ここがあなた達のクラスよ。」
しずな先生にそう言われ、ネギとネロは中を覗いてみるとたくさん
の生徒の姿があった。
「へぇ～、結構にぎやかなクラスだな。」

「うん、そうだね。（これが……僕と兄さんがこれから教えることになる人達か～…。）…そうだクラス名簿！！」
そう言って、ネギはしずな先生から貰ったクラス名簿を開いた。
ネロも上から覗いて見た。
そこには、たくさん顔写真と名前が書いてあった。

「げっ！？…い、いっぱい……。」

「確かにたくさんいるな。」

「早くみんなの顔と名前を覚えられるといいわね。」

「あうっ…。（うぅ…こんなたくさんの年上の女の人達に教えるのか……何だかドキドキしてきた…。本当に僕こんな異国の地で先生なんてできるんだろうか……お姉ちゃん…アーニャ……僕大丈夫かな…。）」
そうネギがいろいろ考えているとポフッと頭の上に手が置かれた。

「ウジウジ考えんな、親父みてぇなマギステル・マギになりてぇんだろ？」

「あっ……うん！！（そうだ！！僕は一人じゃない、僕には兄さんがついてるんだ！！）……よし！！」
覚悟を決めたネギはドアをコンッコンッとノックしてドアを開いた。

「失礼しま……。」
その時、上から黒板消しが落ちてきたが
ピタッ
一瞬、当たる寸前で止まり
バキャッ
と言う音と共に黒板消しが真っ二つになった。
「ネギ、大丈夫か？」

「うん、ありがとう！！」
黒板消しトラップから守ってくれたネロに礼を言い、一歩踏み出したが
ガッ
「うわぁっ！？」
今度はロープに足を引っ掛け転びそうになったが
ガシッ
ネロが襟の部分を掴み止めた。
「大丈夫か？」

「…うん……。」
その光景を見ていたクラスの生徒達は驚き
「えぇーっ子供!?」

「ゴメン!!てっきり新任の先生かと思って大丈夫!?」
ネギの元にクラスの大半が寄ってきた。
すると、しずな先生がパンパンと手を叩き注目させた。
「いいえ、その子があなた達の新しい先生よ。さぁ、自己紹介してもらおうかしら。……ネギ君、ネロ君。」

「は、はい!!」

「あぁ。」
そして、ネギとネロは教卓の前に立った。
「ええと…あ、あの……僕……僕……今日からこの学校でまほ…
…英語を教えることになりましたネギ・スプリングフィールドです。
3学期の間だけですけどよろしくお願いします。」

「同じく英語を教えることになったネロ・スプリングフィールドだ。
よろしく頼む。」
二人の自己紹介が終わるとしばし沈黙に包まれたが

「キャアァァ！！かわいいいー！！それに、かっこいいいー！！」
黄色い声をあげ二人の元になだれのように迫ってきた。

「何歳なのー！？」

「えぅっ！？その…１０歳で……。」

「そっちのお兄さんは！？」

「……１７だ…。」

「どっから来たの！？何人！？」

「えっと…兄さんと一緒で……ウェ、ウェールズの山奥の……。」

「ウェールズってどこ？」

「今どこに住んでるの！？」

「いや…まだどこにも……。」
という風に、もみくちゃにされた。主にネギが……

「ホントにこの二人が今日から担任と副担任なんですか～！？」

「こんなにカワイイ子とカッコイイ人もらっちゃっていいの～！？」

「コラコラ、あげたんじゃないのよ食べちゃダメ。」

「ホントに先生なんだ～。」

「ねぇ、君ってば頭いいの！？」

「い…一応、大学卒業程度の語学力は…。」

「スゴーイ！！」

「あーん！！カワイー！！」

「わわーっ！？」

突然、ネギは後ろから思いきり抱きしめられた。

そんな歓迎されているネギの姿をネロは見ていた。

「ネギ君はちゃんと教師の資格を持ってるけど見てのとおりあなた達より年下よ、お手やわらかにね。それと、ネロ君は年上だから何かわからないことがあったら彼に聞いてね。」

『ハーーイ！！』
しずな先生の言葉に生徒達は大きな声で返事をした。

ガッ

その時、一人の生徒がネギの胸ぐらを掴み持ち上げ教卓の上に座らせた。
その生徒とは朝出会ったツインテールの生徒だった。

「ねぇ、あんたさっき黒板消しに何かしなかった？何かおかしくない？あんた……。」

「え……。」

「キッチリ説明しなさいよー！！」
先程の黒板消しのことを言っているのかネギを問い詰めていた。
さすがにネロもやばいと思い止めようとしたその時

「いいかげんになさい！！」
一人の生徒が机をバンッと叩き騒ぎをおさめた。
その生徒は、金髪の髪を腰辺りまで伸ばした容姿をしていた。

「皆さん席に戻って、先生がお困りになってるでしょう。アスナさんもその手を放したらどう？もっとも、あなたみたいな凶暴なおサルさんにはそのポーズがお似合いでしょうけど……。」

「何ですって？」
金髪の生徒の言葉に、ツインテールの生徒もといアスナはギロンッと目を鋭くさせ睨んだ。
しかし、金髪の生徒はアスナを無視しネギに目を向けた。
「ネギ先生、先生はオックスフォードをお出になった天才とお聞きしておりますわ。教えるのに年齢は関係ございません。どうぞＨＲ［ホームルーム］をお続けになってください。」

「…は……どうも…。」
金髪の生徒にそう言われ、曖昧ながらもネギは答えた。

「委員長、何いい子ぶってんのよアンタ！！」

「あら……いい子なんだからいい子に見えてしまうのは当然でしょ。」
アスナはネギから手を離し、金髪の生徒に向き直った。
金髪の生徒は髪の毛先を指でいじりながらクールに答えた。
すると

「…何がいい子よ！！このショタコン！！」

「なっ……。」
アスナは周りの皆に聞こえるような声でそう呟き、金髪の生徒は身体を震わせ反応しアスナに掴みかかった。

「言いがかりはおやめなさい！？あんたなんかオヤジ趣味のくせにいい！！」

「なっ！？」

「知ってるのよ。あなた高畑先生のこと…「うぎゃー！？その先を言うんじゃねー！！この女ーーッ！！」
取っ組み合いになりケンカに発展した。

「（あわわ、ケンカだ大変だ……！？…ここは先生として……。）」
それを見ていたネギは焦り止めるため話しかけたその時

ゴンッ　ゴンッ

「「いたぁっ！？」」
ネロがアスナと金髪の生徒の頭に拳骨を放ち騒ぎを鎮めた。
アスナと金髪の生徒はあまりの痛さにその場で悶絶していた。

「…たくっ、時間がおしてるんだ授業をするぞ。ネギ……頼む。」

「う、うん！！」
ネロにそう言われ、ネギは頷き教卓の前に立った。
ちなみに、ネロは窓際で壁に背を預け腕を組んでネギを見守っている。

「あ…あの、え～～と……まず１２８ページの……の…の……と…届かない～。」

ネギは黒板に本文を書こうとしたが、身長が低いため上の方まで手が届いていなかった。
それを見たクラスは声をあげて笑っていた。
すると
「先生…この踏み台を……。」
「あ、ありがとうございます…委員長さん。」
「支えて差しあげましょうか…先生？」
「あ…いえ……それはっ…。」
金髪の生徒がどこからかやけに高級そうな踏み台を出しネギの元に差し出し、さらに支えようかと聞いてきたがネギはやんわりと断った。
そして、授業が再開したが
ポコッ
「あいたっ！？……？……？…。」
突然、なにかがネギの頭に当たった。
その後、何個も飛来しネギの頭に当たっていった。
そんな中、ネロは冷静にその出所に視線を向けいつの間に持っていたのかチョークをその出所目掛けて投げつけた。
コッ

「いたぁっ！？」

「さっきから、何をやっている……アスナ…。」
投げつけた先にはアスナがおり、チョークが直撃したおでこを擦っていた。

「いたた……ちょっとあんた！？なにすんのよ！！」

「それはこっちのセリフだ。…お前こそ何ネギにものをなげてるんだ。」

「それはっ…！？……って、委員長！！あんた何そのガキに吹き込んでんのよ！！」
アスナは、ネロに何か言おうとしたが金髪の生徒がネギに怪しいことを吹き込んでいるのが目に入り、アスナは筆箱を投げすぐにケンカに発展した。
そして、その後すぐに授業終了のチャイムが鳴ってしまった。
その途端、教室にいた生徒達は一斉に教室から出ていった。

「ふぅ～……。」
そして、ネギは疲れた様子で教室から出てきた。

「大丈夫か？…ネギ。」

「うん…ちょっと…。」

「ネギ先生、初授業はどうでしたか？」
すると、タイミングよくタカミチが話しかけてきた。

「よぉ、タカミチ。」

「タカミチ…それが大変でさあまり「た、高畑先生！！こんにちは！！」…わっ！？」
ネギが感想を言おうとした瞬間、どこからともなくアスナが現れた。
「あたしがついてるから大丈夫ですよ！！初授業も大成功だったんですよね！！ねっ、ネギ先生！！」

「え……。」

「ほほう……そりゃあよかったありがとうアスナ君。じゃあ、ネギ君のこと頼んだよ。」

「あ…は、はい！！……高畑先生…。」
タカミチはアスナの肩をポンッと叩くと去っていった。
残されたアスナは、タカミチの名前を呟きながらタカミチに叩かれた肩を擦っていた。

「え～、タカミチのこと好きなんだー。」

「まぁ、あの態度の違いを見りゃ分かるよな。」

「うるさいわね。大体、何であんた達が高畑先生の知り合いなのよ。言っとくけど、あんた達の面倒なんてみないわよ。あと、あんたみたいなガキンチョが先生だなんて絶対認めないんだから……。」
そう言うと、アスナはコノカと共に走り去っていった。
途中、コノカが“気にすんなやー”と言っていた。

そして、ネギとネロは学園の広場のオブジェ近くに座っていた。

「…はぁ、初めての授業…失敗しちゃったな……。」

「誰だって最初は失敗するもんだ…元気出せ。」

「うん……後でタカミチに相談してみようかな?」

「あぁ、そうしろ。困った時はタカミチだ。」

「うん。」
ネギは返事をすると、不意にクラス名簿を開いた。

「それにしても……なんだよ、あの子の態度…ひどいよまったくも

ー。……えーと……。」
そして、ネギはクラス名簿を見渡し一人の生徒を探した。
その間に、ネロも隣から覗き見て生徒達の名前と顔を記憶していった。

「…カグラザカアスナ……って言うんだ…変な名前。…今日は、この子の所に泊まれって言われたけど……絶対泊めてくれないと思うな…どーしよ……。」

「まぁ…なるようになるって、もしもの時は学園長に言えばいいんだよ。」

「…そっか……あっ！！そうだ！！」
そう言って、ネギはリュックからペンを取りだしキュッキュッとクラス名簿のアスナの写真に落書きをした。

「ぷっ……フーンだ…。」

「そういうことは……ほどほどにな……。」
ネロはネギの頭を撫でながらそう忠告した。

「…ん？……。」
その時、ネギが目線を上げると一人の生徒が階段を下りてくるのが見え、ネロもネギの目線の方に向いた。

「…あれ……あれは27番の宮崎のどかさん……。」

「おいおい…あんなに本持ちやがって危ねぇな。」
二人がそう呟いたその時

くきっ

「あっ…。」
のどかが足を踏み外し階段から宙へ投げ出された。

「…！？……ネギ！！」

「うん！！」
その光景を見たネロはネギに呼び掛け走りだし、ネギは杖を手に取り

「きゃあああぁぁ！！」
落下するのどかに向け振った。
すると

ふわりっ

地面に激突しかけたのどかの身体が一瞬浮きあがり

ボフッ

ネロが抱き止めた。

「おい！！大丈夫か、のどか！！」
ネロはのどかに点呼を取りながら顔を寄せ呼吸をしていることと胸

が上下していることを確認した。
「ふぅ……気絶してるだけか……おーい、ネギー！！…って、あれ？」
ネロが振り向きネギを呼ぼうとしたが何故かアスナに連れ去られていた。
「うぅ…。」
ちょうどその時、のどかの意識が戻った。
「おい…大丈夫か、のどか。」
「…ぅぅ……ネロ…せんせー……？……ひゃあぁ！？」
「うおぉ！？」
すると、のどかは目の前にネロの顔があったため驚き思わず突き飛ばしてしまった。
それにより、ネロは支えていた手を放してしまいのどかはゴツンッと頭を打ち付けてしまった。
「…あうぅ……。」
「わ、わりぃ！？大丈夫か？…つーか、今結構いい音響いたな。マジで大丈夫か？」
「だ、大丈夫ですぅ…。」

「そ…そうか？」
頭に大きなたんこぶをくっ付けたまま大丈夫と言うのどかにネロは若干苦笑いしてしまった。

「そういや、さっきすげぇ沢山本を抱えてたよな？何処に持っていこうとしてたんだ？」

「えっと……図書館島に…です……。」

「図書館島？……あぁ！！もしかして湖のど真ん中にある建物のことか！！」

「…はい。」
ネロはのどかの返事を聞くと地面に散らばっている本を拾い始めた。

「…なら持っていくの手伝ってやるよ。」

「えっ！？そ、そんな悪いですよ！！」
ネロの言葉を聞き、のどかは両手をパタパタと動かしながらそう言ったが

「それに私、本を運ぶのは慣れてますから……。」

「…さっき階段から転げ落ちたのにか？」

「あぅっ！？」
ネロのツッコミにあえなく撃沈し
「…お、お願いします……。」

「おうっ！！」
結局、ネロに本を持ってもらう事になった。

そして二人は肩を並べながら歩いていた。
その途中、ネロはのどかに話しかけた。
「なぁ、のどかって本が好きなのか？」

「…は、はい……ネロ先生も本がお好きなんですか？」

「まぁ、暇な時は音楽聞いてるか本を読んでるから……そこそこ本は好きだな。」

「そうなんですか。」
ネロが本を好きと言った瞬間、のどかは少し嬉しそうに笑った。
それを見たネロは言った。

「なぁ、のどか。お前やっぱり笑ってる方がかわいいぞ。」

「えっ…／／／／／」
そう言われ、のどかは顔を真っ赤にした。

「それと、前髪は上げた方がいい。前見にくいだろ。それにイメチェンになるしな。」

「…は、はい……がんばって…みます…／／／／／。」
そして、のどかは顔を真っ赤にしたままそう言った。

数分後

「おっ！！着いたみたいだな。」
ネロとのどかは図書館島の前まで来た。

「ここからは、一人でいいのか？」

「はい、大丈夫です。」
そう言われ、ネロは自分が持っていた数冊の本を渡した。

「じゃあ、俺はちょっとネギの奴を探さなきゃいけねぇから。もう

転ぶんじゃねぇぞ。」

「はい。先生こそ気をつけて……。あっ！！それとこれから教室でネロ先生とネギ先生の歓迎会がありますから来てください。」

「あぁ、分かった。じゃあな。」
そう言って、ネロはポフッとのどかの頭に手を置き撫でた。
その瞬間

「っ！？…／／／／／／／」
ボンッと音を立ててのどかはさっき以上に顔を真っ赤にした。
そして、ネロはその場からネギを探しに走り去っていった。

「お～い、ネギ何処だ～？いたら返事しろ～！！」
のどかと別れた後、ネロはネギの名前を呼びながら探していた。
すると

「……兄さ～ん！！」

「おっ！？」
遠くから声が返ってきてネロがそっちの方に向くとネギとアスナが走ってきていた。

「やっと見つけたぞネギ。のどかを助けた後、アスナに連れられてどっかいっちまったから心配したぜ。」

「うん、ごめんね兄さん。」
ネロはネギの頭を撫でながらアスナに話し掛けた。

「アスナ…お前さっき魔法見たんだろ？」

「えっ！？」

「…図星か…まぁ、とりあえずその事に関しては黙っといてくれねぇか？俺はともかくネギの奴がオコジョにされちまうからよ。」

「だ、大丈夫だよ兄さん！！さっきアスナさんとも話したから。」

「そうか……なら、いいや。」
そう言うと、ネロは歩き出した。
そして、ネギとアスナもそのあとについていった。

ネギとアスナはネロの後ろを歩きながら会話をしていた。

「で、アンタどーゆー魔法が使えるのよ。」

「えーと、あんまり多くないですが……修行中の身なので。」
どうやら魔法について話しているようだった。

「ホレ薬とかないの！？」

「…ありません…ゴメンナサイ……。」

「ううっ……じゃあお金のなる木は！？」

「あの…意味わかんないんですけど……。」

「ん～～、いまいち使えないわね。」

「すみません、あとできるものといえば読心術くらいしか…「それよ！！！」…。」
？読心術？という言葉に反応してアスナが大声を出しネギはビクゥッと肩を震わせ驚いた。

「読心術か……それをうまく使って…高畑先生の気持ちを探り出せれば……よし！！」

アスナはそう言うと、ネギを引っ張ってネロを追い越して教室まで走っていった。

「早速実行よ！！荷物取ってくるからちょっとそこで……。」
そう言って、アスナが教室のドアを開けた瞬間たくさんのクラッカーの音が響いた。

「ようこそ！！ネギ先生とネロ先生ッ！！」

「「へっ……？」」
突然の出来事にアスナとネギは呆然としていた。
すると、二人の後ろにネロが遅れて現れた。

「あっ！？そういや、のどかが俺とネギの歓迎会するから教室に来てくれって言ってたな。すっかり忘れてた。」

「あ……そーだ、今日あんた達の歓迎会するんだった……あたしもすっかり忘れてた！！」

「えぇっ！？」
ネロとアスナの言葉にネギが声をあげ驚いていると生徒達が寄ってきた。

「ほらほら、主役はまんなか！！」

「わぁー、嬉しいなぁ。」

「ネロ先生も！！」

「あぁ、サンキューな。」
生徒達に誘導されネギとネロが席に座ると同時に生徒達がいろいろと質問してきた。
主にネギがよく質問や話をしていた。
その隣で、ネロはジュースを飲みながら見ていた。
すると

「あの～……ネロせんせい……。」

「ん、のどか？…なんか用か？」
控えめな感じでのどかがネロを呼びながら現れた。

「あの～さっきはその～…危ない所を助けていただいた上に、本まで持ってもらってその～あの～……これはお礼です…図書券……。」

「え、くれんのか？サンキュー。」
そう言って、ネロが図書券の入った小さな封筒を取ると急に周りがざわめいた。

「本屋がもう先生にアタックしてるぞ！！しかも、イケメンの方を！！」

「違います／／／…それに私本屋じゃないです……。」

ある一人の生徒がそう言うと、のどかは少し頬を赤く染めながら否定した。

「じゃあのどか、ありがたく使わせてもらうぜこの図書券。」

「あ…はい。」

ネロはそう言って、遠くの席に座っているタカミチの所へ歩いていった。

「よっ、タカミチ。」

「やぁ、ネロ君。」

ネロが声をかけると、タカミチは軽く手をあげて返した。

「ネロ君は、この学園には慣れたかい？」

「まぁ、少しは慣れた…って感じだな。」

「そうか。……ところで、ネロ君。」

タカミチと談笑をしていると突然、真剣な表情になってネロに問いかけてきた。

「ん、なんだ？タカミチ。」

「ネギ君にはやっぱり……伝えてないんだね、その右腕のことは。」

「っ！？……あぁ…。」

タカミチがそう言うと、ネロは表情を曇らせ小さな声で答えた。

「そっか、まだ伝えてないのか。…でも、いつかはネギ君にもその右腕の事は知られてしまう……だから、その時は……。」

「…わかってる……わかってるんだよ、そんな事は。ただ今だけは…ネギには幸せに過ごしてもらいたいんだよ。」

そう言って、ネロは席を立ち誰にも気付かれないように教室から出ていった。

「……ネロ君…。」

そして、タカミチはネロが出ていった教室のドアを見ながらネロの名前を呟いた。

惚れ薬パニック

教室を出ていったネロは、その後ネギ、アスナ、このかの三人に会いネギと一緒に泊めてもらう事になった。

「キャーーーッ！？」

「うぉ！？」
突然の悲鳴にネロは飛び起きた。

「ちょっ、ちょっとあんた何で私のベッドで寝てるのようーーっ！！」

「えう…お姉ちゃ……あっ！？ア、アスナさん！？すすす、すいません僕いつもお姉ちゃんと一緒に寝てたのでつい……。」

「な、何よそれ！？」
ネロは欠伸をかきながらその会話を聞き、状況を理解した。
どうやらネギがアスナのベッドに潜り込んだようである。

「わっ！！もう5時じゃない、行ってくるねこのか！！」
アスナはそう言いながら、とんでもないスピードで着替え瞬く間に部屋から出ていった。

「アスナの奴、何処に行くんだ？」

「ん～？バイト。……ネギ君、ネロ君朝ご飯つくったげるよ。目玉焼きとスクランブルエッグどっちがええ？」

「あ……じゃあ、目玉焼きで…。」

「ネロ君は？」

「俺も目玉焼きでいいぞ。」

「了解～。」
このかはニコッと笑うとキッチンに入っていった。
そして、数分後このかが目玉焼きを作り三人で食べた。

「全くもぉ、バイトも遅刻しちゃったしホントあんたなんか泊めんじゃなかった！！」

「えうっ！？僕のせいじゃ……。」

「仲悪いなー、二人。」
現在、アスナ、このか、ネギ、ネロの3人は全速力で走っていた。
途中、アスナとネギがいろいろと会話をしていたが、ネロは気にせず走り続けた。

そして、ネロとネギは下駄箱の所へ行きネロはすぐに上履きに履き替えたが

「ん？……ん～～。」
ネギは必死に手を伸ばしていたが、身長が足らないためまだ履き替えていなかった。

「と、届かない……。」
すると、カタンッと誰かがネギの代わりに下駄箱の扉を開けてくれ、さらに靴まで入れてくれた。

「おはようございますネギ先生。教室まで御案内しますわ。」

「ど、どうも…。」
それは、ネギのクラスの委員長であった。

「おはようございます、いいんちょーさん。」

「わりぃな……えぇっと？」

「雪広あやかでございます。昨晩はよく眠れましたか？」

「ええ、とっても。」

「俺も結構寝れたぜ。」
そんな会話をしながら歩いていると、教室が見えてきた。

「あ…。」
よく見ると、教室の窓を開けてのどかが日直ノートを胸に抱えながらこちらを見ていた。

「あ！！おはよーございます、宮崎さん。」

「おは……おはよーです。」
ネギが一番に気づき挨拶をすると、のどかは控えめな感じで返した。
そして、ネロの方に視線を向けると

「…っ／／／／／」
顔を真っ赤にして、教室の中に戻っていった。

「…のどかの奴どうしたんだ？」

「さぁ？」
そんなのどかを見て、ネロはネギに訊いてみるが、訊かれたネギは首を傾げネロも首を傾げた。

考えても仕方がないので、教室に入った。
そして、アスナ達は自分の席の所に行き

「き、起立……気をつけ……。」
今日の日直であるのどかが号令をかけた。

「…礼ぃ……。」

『おはよーございます！！』

「お…おはよーございます。」

「着席……。」
ネギは、緊張しながらも挨拶を返し生徒達は着席した。

「しっかりやれよ、ネギ。」

「うん。」
ネロはネギの肩に手を置きながらそう言うと、窓際まで歩いていき壁に背を預けネギの初授業を見守った。

「じゃあ、１時間目をはじめます。テキスト７６ページを開いてください。」
ネギはそう言って、テキストの本文を声を出して読んだ。

「Ｔｈｅ ｆａｌｌ ｏｆ Ｊａｓｏｎ ｔｈｅ ｆｌｏｗｅｒ.

Ｓｐｒｉｎｇ ｃａｍｅ．Ｊａｓｏｎ ｔｈｅ ｆｌｏｗｅｒ ｗａｓ ｂｏｒｎ ｏｎ ａ ｂｒａｎｃｈ ｏｆ ａ ｔａｌｌ ｔｒｅｅ．Ｈｕｎｄｒｅｄｓ ｏｆ ｆｌｏｗｅｒｓ ｗｅｒｅ ｂｏｒｎ ｏｎ ｔｈｅ ｔｒｅｅ．Ｔｈｅｙ ｗｅｒｅ ａｌｌ ｆｒｉｅｎｄｓ．……今の所誰かに訳してもらおうかなぁ？…え～っと……。」

そう言って、ネギは英文を訳してもらう生徒を決めるためにキョロキョロと生徒達をみたが

サッ

ササッ

皆嫌なのかあからさまにネギと目を合わせようとしなかった。

そして、ネギは自分で決めたのかある一人の生徒を見ていた。

それは

「……。」

首を限界まで横に向け、英文を訳したくない感がバリバリに出ていた。

だがネギは

「……じゃあ、アスナさん。」

「なっ！？…何で私に当てるのようっ！？」

英文を訳したくない感を無視してアスナを指名した。

「え…だって。」

「フツーは日付けとか出席番号で当てるでしょ！！」

「でもアスナさん、ア行じゃないですか……。」

「アスナは名前じゃん！！」

「あと感謝の意味も込めて……。」

「何の感謝よっ！？」
そして、漫才のような会話はあやかの言葉で終止符が打たれた。

「要するにわからないんですわね、アスナさん。」

「なっ！？」

「…では、委員長のわたくしが代わりに…「わ、わかったわよ訳すわよ。えーと……。」
あやかの挑発的な言葉にアスナは仕方なく英文を訳そうとした。
しかし

「ジェイソンが…花の上……に落ち春が来た？ジェイソンとその花は…えと……高い木で食べたブランチで……骨…が百本？えーと……骨が……木の……。」

だんだんと声が小さくなりついには何も言わなくなったアスナをみてネギは

「……アスナさん、英語ダメなんですね。」

「なっ…！？」

口に手をあてクスッと笑い、そう言った。

それを間近で聞いたアスナは顔を真っ赤にさせた。

その時、コツンッとネギの頭にかなり軽い拳骨が放たれた。

そして、ネギが後ろをみると呆れた表情をしたネロが立っていた。

「えっ……どうしたの、兄さん？」

「……いいか？ネギ。教師ってのはな、絶対に生徒をバカにしちゃいけねぇんだぞ？」

「えっ！？ぼ、僕バカになんかしてないよ！？」

ネギはネロの言葉に驚きながら否定すると、またかなり軽い拳骨が頭に放たれた。

「しただろ今。英文訳せなかったアスナ見てお前さっきなんて言ったんだ？」

「えっと……あっ！？」

そこで、ネギは自分の失態に気がつきアスナの方を向き謝った。

「ご、ごめんなさいアスナさん！！」

「え、えっと……い、いいわよ別に……。」
アスナもさすがにこんな間近で思いきり謝られては怒る気にもなれなかった。
その後はネロがネギにアドバイスを教えながら進められた。
そして、授業が終わりネギは少し用事あるからとネロに言って別々に別れた。

とある広場

ネロはネギと別れ、特に何もすることがないので芝生の上に寝転がりヘッドフォンをつけ音楽を聴きながら昼寝をしていた。
すると、トントンッと叩かれヘッドフォンを取り前をみるとネロのクラスの早乙女ハルナ、綾瀬夕映、宮崎のどかの三人が立っていた。

「スミマセン、ネロ先生。朝の授業について質問が」

「質問ね……で、何処について聞きたいんだ？ハルナ。」

「あ、私じゃなくてこっちの子なんですけど。」

「のどかか、昨日ぶりだな。……ん？」
ネロはのどかを見ていてある事に気付いた。

「のどか、お前やっぱり髪型変えたんだな。似合ってるぞ。」

「え……。」
そして、ネロがそう言った瞬間

「でしょでしょ！？かわいーと思うでしょ！？この子かわいーのに顔出さないのよねー！！」

「えっ……あ……。」
両側にいたハルナと夕映がのどかの前髪を大きく開かせた。
のどかは一瞬混乱していたが

「っ！？／／／／／／」
すぐに顔を真っ赤にさせ、ダッとその場から走って逃げてしまった。

「あん、ちょっとのどかー、ゴメンネ先生。」

「のどかー。」
突然、逃げてしまったのどかを追うためハルナは軽くネロに謝り走り出していった。

「……なんだったんだ今の？……質問はいいのか？」
取り残されたネロは少しの間のどかは何故逃げていってしまったのか考えていたが、結局どうでもよくなりその場から立ち上がった。

「とりあえず、ネギを探すか。」

ネロはそう言って、校舎の方へ向けて歩いていった。

校舎の中を歩きながら、ネロはネギを探していた。

「ん？…アスナ？」

前からアスナがなにやら慌てた様子でこちらに走ってきていた。

「あっ！！ちょうど良かった、あんたネギを見なかった？」

「いや、俺もさっきからネギを探してるんだがいねぇんだよ。……何かあったのか？」

「いや、実はね……。」

ネロに訊かれたアスナは何故、ネギを探しているのかを簡潔に説明した。

「……惚れ薬…ねぇ。ネギの奴、惚れ薬が違法だってこと忘れたのか？」

「えっ！？惚れ薬って違法なの！？」

「まぁ…な。」
そんな会話をしていたその時
「ネギせんせー！！」
ドタバタガターン
「「っ！？」」
突然、声が聞こえたと思ったら大きな物音が響いてきた。
「今のは、本屋ちゃんの声！？」

「あぁ、それにさっきの声からしてネギも居るみたいだな。」
そう言うと、ネロとアスナは声のした場所へ走っていった。

そして、声がした部屋にたどり着いたのだが
ガチャガチャ
「げっ！？何よコレ、カギがかかってる。」
なんとしっかりとカギがかけられていた。
「ちょっと退いてろ、アスナ。」
「な、何する気なの。」

「ドアが開かねぇなら…壊すまでだ。」
そして、ネロは包帯が巻かれた右腕を振りかぶった。
「ち、ちょっとあんた！！右腕怪我してるんじゃ…。」

「大丈夫だ。」
そう言って、ネロは振りかぶった右腕でドアを殴り
バキィッ
ドアを叩き割り吹き飛ばした。
「に、兄さん！！あ、危ないよ！！」

「あっ、わりぃ。ちょっと力入れすぎちまったみてぇだ。」

「うぅっ、ごめんね兄さん。」

「まぁっ、気にすんなって。」

「…うん。」

すると、ネギは突然クラス名簿を取りだし何かを書き込んだ。
ネロが見てみると、のどかに矢印が付き『すごくカワイイ』と書いてあった。

「ふっ、なんだネギ…のどかに惚れたのか？」

「そ、そんなのじゃないよ！？」
ネロにそう言われて、ネギは両手をパタパタと振り慌てて否定した。

「慌てて言ってたら、逆に怪しいぞ。」

「もう、兄さん！！」

「ははっ！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1836s/

悪魔の力を持ちし魔法使い

2011年11月6日03時08分発行